

## 西行櫻

作者 世阿弥 素材 和歌など 場所 山城国西山 季節 三月 分類 三番目物,略四番目物  
登場人物 シテ 桜ノ精, ワキ 西行上人, ワキツレ 花見男, アイ 西行庵ノ能力

～あらすじ

都の者たちが花見に西山の西行の庵に訪れる。

西行は人々を迎え入れつつも、人の多さに静けさを惜しみ歌を詠む。

すると夜に西行の夢中に老桜の精が現れ、歌の内容に物申す。そして都の桜有様を語り、春の夜のひとときを惜しみながら、夜明けと共に姿を消す。

今回の「にっぽんの芸能」で放送の仕舞はキリまで。(仕舞は通常クセのみの上演です。)

夜明けと共に幽玄から覚める様子が舞台を彩ります。

下記、クセキリ詞章です。(夜明けを告げる後夜の鐘の下りは中略されます。)

～ 都の花盛り 沔『地【

『見渡せば

【柳櫻をこき混ぜて。都は春の錦。燦爛たり。千本の櫻を植えおき其の色を。所の名に見する。  
千本の花盛り。雲路や雪に残るらん。毘沙門堂の花盛。四王天の栄華もこれにはいかで優るべき。  
上なる黒谷下河原。むかし遍照僧正の

『浮世を厭ひし華頂山

【鷲の御山の花の色。枯れにし。鶴の林まで思ひ知られて哀れなり。清水寺の地主の花松吹く風の  
音羽山ここはまた嵐山。戸無瀬に落つる。瀧つ浪までも。花はおおひ川。井堰に雪やかかるらん。

解釈

柳と櫻の混ざり合う都の春は一幅の錦の様に鮮やかだ(素性法師の歌)。櫻に染まる都の景色は、まるで雪が降り積もる中、わずかに道を残すばかり。四天王の毘沙門様を引き合いに、天上栄花も今の都の様子には及ばないことであろう。各所の花に無常を感じ、釈迦の涅槃も思い浮かぶ。燦爛たる花盛り。

～白みゆく夜明けに春のひと時の名残を惜しむ

『花の蔭より。明けそめて

【鐘をも待たぬ別こそあれ。わかれこそあれ別こそあれ

『待て暫し待て暫し夜はまだ深きぞ

【白むは花の影なりけり。余所はまだ小倉の山陰に残る夜櫻の。花の枕の

『夢はさめにけり

【ゆめは覚めにけり嵐も雪も散り敷くや。花を踏んでは同じく惜む少年の春の夜は明けにけりや  
翁さびて跡も無しおきな寂びてあともなし

解釈

暁の鐘を待つこと無く白んで見えるのは、花の輝き。二人(僧と櫻の精)は別れを惜しむも、夢は覚めて暮れ行く春の寂しさを少年の春(白氏文集)に例えるのであった。